

迷っている俺が主人公
なのはどこかおかしい

楠木 蓮華

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

性同一性障害の主人公、四季崎冬華は迷っていた。自分の人生のあり方に、自分の生
き方に……自分の存在に。

そんな時、四季崎冬華は出会う。vividな人達に……果たして四季崎冬華は自分
のあり方を見つけられるのか。

「こうづ期待☆」

お楽しみに

「やらせた癖に無視かよ」

目

次

迷いに迷う物語

太陽のような笑顔

親指立てと爆弾トーク

12 6 1

迷いに迷う物語

どうもこの小説を見ている人、はじめまして、主人公だ。

なんで自分から主人公とか言っちゃつてんの？ みたいな思いはあるだろうが、それは心中に留めて聞いて欲しい、というか留める。

早速だが、この世には生まれ持つての才能というものがある。才能を持ったものは才能を持つていなないものよりも有利に、楽な人生を送れることを約束される。そして、才能を持ちえなかつたものは才能を持つたものには絶対に勝つことはできない。

努力すれば才能を持ったものにも勝てる、なんていうのは世迷言だ。

さて、俺がなぜこんなことをわざわざ言つたのか……それは、俺の目の前で次元犯罪者と仲良さそうに話している一人の女性が原因だ。いや、元次元犯罪者……と言つた方が適切かもしれない。

「いやいや、君には感謝してもしきれないよ……四季崎玲奈」

「何言つてるのよ、私は別になにもしてないわ」

「ふつ……実に君らしい答えだな」

俺のような子供ですら、すぐにわかってしまうほどの有名人、ジェイル・スカリエツ

ティは苦笑しながら話している。その話相手こそ、俺の母親である四季崎玲奈だ。

四季崎玲奈……九歳の時、地球という管理外世界より管理局に入った人物で、その時からお偉いさん方からも一目置かれていたと言われる、最強の魔導師。

今回の事件、名称はJS事件本当の名称をHD事件というらしい。それについて俺は詳しく述べたわけではないが……母さんがジェイル・スカリエッティを操っていた本当の黒幕に気づき、たつた一人で叩き潰したそうだ。

そんなこともあってか、ジェイル・スカリエッティはよく家に遊びに来る。母さんと馬は合うようで、時々お酒を酌み交わしては楽しそうに談笑している。

「ん……君は」

ジェイル・スカリエッティが俺の存在に気づき、俺のほうを見る。

「どうも……」

俺は軽く会釈と挨拶を交わし、その場から退散しようとする。

「ちよつと待ちたまえ……君は四季崎玲奈の……」

「息子よ」

「む、息子？ だが……」

「息子……なのよ、あまり深くは追求しないで」

母さんはジェイル・スカリエッティの言葉を遮る。その言葉は少し早口になつてい

て、語尾も強くなつていてる。

「そ、そうか……引き止めて悪かつたね、名前だけでも教えてもらつていいかい？」

「……冬華」

俺は名前を告げると、その場から退散する。自分の部屋に逃げるように入り込み、いつもの場所……無駄にふかふかのベッドに体育座りになる。

「はあ……」

なぜ才能の話をしたのか……それは言わずともわかるだろうが、最強の魔導師の子供。そのレツテルというのは予想以上に大きい。そして……それを裏切つてしまえば、どれだけの批判があるか……そんなもの、想像しなくともわかることだろう。

それだけじやない……なぜジエイル・スカリエッティがあの時、俺が息子と言われたことに動搖していたのか、その真実をぶつちやけてしまえば、俺は性別医学上では……女、なのだ。

体だつて紛うことなき女の体をしている。しかし……なぜ母さんは息子と言つたのか……それは、俺が性同一性障害だからだ。

体は女でも心は男。そんな状態でいるのと同時に、魔力の才能は何一つとして持つていなかつた。

そんな存在を、周りの奴らはどう思うだろうか。期待していた奴らはどう思うだろう

か……俺の知ったことではないが、ろくな事ではないだろう。

「はあ……」

本日二度目の溜息……溜息をすると幸せが逃げるというが、幸せが枯渇している人が溜息をすると一体どうなるのだろうか。

「出かけるか……」

運がいいことに、今天気は曇っている。晴れている時は外出は控えたいが、今なら大丈夫だろう。

俺は、早速着替える。元はジャージにメガネというラフな格好だが、流石にこれで外出るのはどうかと思い、無駄にフリフリがある可愛らしい服がたまたま目に入つたので着替えた。

「ちょっと出かけてくるよ……」

「あ……ええ、 いつてらっしゃいね」

「気をつけて行つてくるといい」

「はい……」

母さんとジエイル・スカリエッティに見送られて外に出る。天気は相変わらず素晴らしくらいに曇つている。

「いい天氣だ」

俺は歩を進める。行き先などない、ただ暇つぶしに……あの家にいることを拒んだ自分が出来る。今唯一の行動だからだ。

そんな後ろ向きな自分が嫌で嫌で堪らないが、俺はそんな自分も嫌いじゃない……どつちなんだと自分でも思う。けど、そんな自分も悪くないとと思うのだ。

「久々に……無限書庫でも行こうか」

俺は行き先を決め……歩き始める。心の行き先は、まだまだ決まらなさそうだ。

この物語は、迷いに迷う物語。自分に迷う物語。vividとは違う、hazyな物語。朦朧とした、はつきりとしない物語の開幕である。

太陽のような笑顔

「到着……したのはいいけど、相変わらず本が沢山あるな。流石は無限書庫」

無限書庫に入ると……目に入るのは沢山の、本・本・本・本・本・本・本・本・本・本本本本本本!!

「お、私は本は嫌いだつ！」

「じゃあなんで来たのかな……」

「あ、ユーノさん……どうも」

このメガネをかけたイケメンはユーノ・スクライアさん。この無限書庫の偉い人らしい。俺からしたら、とつても扱いや……げふんげふん、お優しい人だ。

「うん、四季崎さんは今日も本を読みに来たの？」

「はい、暇だったので」

実際は嘘だ。あの場所に…母さんの近くにいることが耐えられなくて、いつもここに時間を潰しに来ている。

「今日はどんな本を探してるので？」

「そうですね……じゃあ、この前にオススメしてもらつた古代ベルカの歴史の本を読

みます」

俺はこう見えて歴史が好きだ。何故かというと……歴史……好きなの？」

「そうですね、歴史に出てくる人達が右往左往した挙句に、崩壊するところなんかは……ゾクゾクします」

「へ……？」

ユーノさんが驚きと動搖が混ざつて表情でこちらを見ている。あ、やばい……どうしよう、つい本音が。

「じ、冗談に決まってるじゃないですか、嫌だな！」

「そ、そうだよね……あはは

ど、どうしよう、ユーノさんが苦笑いしていらっしゃる!?

「そ、そろそろ本読みますので……」

「あ、うん、わかったよ。 ゆっくりしていつてね」

そういうてユーノさんはどこかへ歩いていった。なんとか誤魔化せた様でなによりだが、今度から口をすべらさないよう気に付けないといけないかもな。

「さて……と」

本のページをめくる。そこには大きく、古代ベルカ伝記と書かれていた。聖王の歴史

や霸王の歴史、冥王の歴史などが書かれていて、見ていて退屈はしなかった。

何より一番目が引かれたのは、本の最後の方に書いてあつた人物だつた。名前は書いていなかつたが、聖王に仕えていたメイドで、そのメイドは実際に戦に参加にして、一騎当千の実力を出していたという。

そしてそのメイドはもちろん女という性別であつたが、自分は生涯一生男であるとい続けていたらしかつた。その言葉に、俺は少し親近感を覚えた。体は女でありながら、心は男。

もしかしたらこのメイドも、もしかしたら俺と同じ境遇だつたのではないか……と。
「ま、考え過ぎかもな」

本を閉じる。この本は面白かつたな……今度他の人にも教えるか。あ……しまつた。俺は今まで母さんとユーノさん以外の人とまともに話したことがなかつんだつけ……。
「つて……もしかして俺つて、ボツチなのでは？」

いやいやいや、確かに……同年代の友達はいないし、顔見知りというか、知り合いは三人くらいしかいないけど……でも、仕方ないじやないか、性同一性障害のおかげで人と関わるのは極力避けてきたし、学校にも行けなかつたのだから。

「つまり、全部病気が悪い……というわけで、俺はボツチじゃない」

そうやって自分で自分に言い聞かせる。本当だよ？　俺、ボツチジャナイヨ？

「ふう……あ、もうこんな時間か」

ふと、外に目をやるとすでに日が落ち始めているのか、オレンジ色に輝いていた。そろそろ帰らないと母さんが心配するだろう……母さんは過保護などころがあるからな、前もちよつと帰るのが遅くなつただけで管理局を総動員させて捜索させた程だ。

「過保護すぎるのも考え方だよな……」

帰り道、もうすぐ沈みそうな太陽の光に当てられながら道を進んでいた。人通りはそこそこで、多過ぎもせず少なすぎもせずと言つた感じだ。

「おつと……もうここまで来てたのか」

そつと顔を上げると、急な坂道に差し掛かっていた。この坂道は通称『心臓破裂の坂』と呼ばれ、徒步で登るだけでも息が上がる。走つて登ろうとすればただでは済まないであろうとんでもない坂なのだ。

「……を逆立ちで尚且つ高速で登れるのは母さんくらいだろうな……」

この坂においても母さんの伝説はある。なにを思つたのかは知らないが、母さんが朝、この坂道で逆立ちで高速に樂々登つたらしい。母さん……一体何をしたかつたんだ。

「はあ……はあ……」

流石に俺はそんな奇想天外なことはできるはずもなく、普通に坂道を登つていく……

この先に待ち構えるお気に入りの場所を目指して、一歩ずつ……一歩ずつ。千里の道も一步からというが、この坂道を登つていくとその言葉の意味がはつきりとわかる気がする。

「後もう少しつ……ふう～……ついたあ」

物凄い達成感を感じながら、持ってきておいたタオルで汗を拭う。そしてゆっくりと今まで登つてきた坂の方を向いた後、視線を上に持っていく。

「いやあ……いつ見てもきれいだな……」

この時間、この位置でしか見れないとしても特別な風景。沈んでいくオレンジ色に染まつた太陽が、街や空を同じような色に染め上げていく、そしてその上にはもう既に夜の色が近づいてきて、とても幻想的だった。

「このまま全ての時間が止まってしまえばいいのに……」

こんなにもなにも出来ない自分と、なんでもできる母さん。そして自分を認めてくれないこの世界。多くの人間に認められたいと思うのは人間の自然的な欲求だ。でも……それはなによりも難しくて、なによりも無意味な欲求だ。

どんなにて願おうが、どんなに努力しようが……その存在によつて人に認められるかどうかは決まってしまうのだから……

本当に……だつたら、いつそ……

「本当にそれでいいの？」

「え……？」

そこには金髪の髪を二つにまとめ、ツーサイドアップにしている女性がいた。

「ひさしぶりつ、ふゆつち」

その女性の笑顔は、さつきの太陽に負けないくらい綺麗だつたと、俺は思った。

親指立てと爆弾トーク

「や、やつほ……ゆきっち」

軽やかな足取りで坂をかけ上ががつてくる金髪の女性……という美しい絵ヅラはそこにはなかつた。そこにあつたのは坂を無謀にも駆け上がりつてきた人の末路があつたのだ。息を切らし、汗をかき……俯きながらふらついた足取りで登つてくる。

「え、えつと……大丈夫つすか？」アリシアさん

「だ、大丈夫大丈夫つ、全く持つて問題ないよ」

そういうながらどう考えても無理をしてるのが見え見えの表情で親指を立てている。

彼女はアリシア・テスマスターと呼ばれるほどの人で、彼女の力があればデバイスは本来の十倍以上の力を發揮できるとかなんとか、そんな超人的な噂の持ち主だ。ちなみに、俺が性同一性障害であることを知る……数少ない人の一人でもある。

「いやあ……沈みかけの太陽を見ながら黄昏る銀髪の女の子つ！　とても良い絵になつてたよ」

「いや、別になりなくてなつてたわけじやないんですけど……」

「今度一緒にショッピング行かない？ 可愛い服とか見繕つてあげるからさつ！」

「いや、俺の話を……」

「あつ！ 海もいいよね、ふゆつちはどんな水着がいい？ 思い切つてビキニにしちゃう？ しちゃう？」

「えつと……その」

「それともショッピングよりもお菓子巡りとかの方がいいかな？ ふゆつちは何が好きなのつ？」

「だ、だから……はあ、アイスが好きです」

俺はアリシアさんが少し苦手だ。別に嫌いというわけではないが、時々見せるこの爆弾トークの人の話の聞かないところ、すぐにアリシアさんのリズムに乗せられてしまうところとか、とても危険人物だ。

「そつかくいいよね、アイスつ」

「そ、そうつすね（……）」

「それで……」

アリシアさんはふうつと息をついてもうほとんど沈んでいる太陽を横目に、ゆっくりと口を開いた。

「本当に時間が止まっちゃえばいいって、思ってるの？」

一転して真剣な表情で俺を見るアリシアさん。その真剣な表情に俺は少し気圧されてしまつたが、唾を飲み込み……少し深呼吸をして、口を開く。

「思つてますよ。世界は俺に優しくないです……確かに母さんは優しいです、でも……母さんから寄せられる期待も、周りから送られる期待と絶望も……俺には重過ぎる」

自分で言つていて情けなく思う。でもこれは事実だ……世界は、俺には優しくない。いつだつて牙をむく……油断させておいて落とす。俺の父さんがいないのだつて、ある意味……世界が俺たち家族を苦しめる為に行つたことなのだから。

「そうだね……確かに世界は人に優しくないよね。人は何を考えているかもわからな
いし……ほんの少しのことで掌を返す……」

アリシアさんの表情はなにか、悲しみに染まつてゐるように感じた。アリシアさんの過去に、一体何があつたのか、俺にはわからない……いや、きっと知ることはできても、理解はできないかもしれない。

「でも、家族はとても大事だよ。私は私の家族を助けるために……支えるために、私なりに頑張つた。みんなで力をあわせて、過去の過ちも……乗り越えてきた」

「うん……そして、ゆきつちのお母さんや、私の友達も支えてくれた。そのことは、

「うん……そして、ゆきつちのお母さんや、私の友達も支えてくれた。そのことは、

とつても感謝してるんだ。みんなのおかげで、私はアリシア・テスター口ツサでいれるんだから」

「……」

「だからきつと、ふゆつちを支えてくれる人は沢山いるよ……ふゆつちが気づいてないだけで、周りの人はきっと、本当のふゆつちを見ようとしてると思うよ……私だって、そう思ってるもん」

初めて見るアリシアさんの表情……まるでいつもの雰囲気が嘘のようだつた。いつものと、今の……どちらがアリシアさんの本当なんだろうか……いや、きっとアリシアさんはどちらも本当なんだろう……

だけど……

「アリシアさんに言われると、なんだかパツとしませんね」

「それを言うの!?」

「だつてアリシアさん、年齢的には母さんと同じ、もしくは歳上なのに……背丈が女性平均よりも全然低いですし」

「ぐさつ!?」

「胸だつて申し訳程度にしかないですし」

「ぐさぐさつ!?」

「何よりいつものノリはただの子供ですからね」

「わ、私はとつても傷ついたよ!?」

「日々の行いのせいですね」

「ううつ、ゆきつちの意地悪うつ！」

そしてなにより、俺は今まで聞き流していたが、一応言つておかないといけないだろう。

「アリシアさん、俺の名前は冬華です。どうか…ですよ？ なんでふゆつちつて呼ぶんですか？」

「だつてふゆつちつて可愛いよね？」

「は……？」

いや、確かにふゆつちは可愛いかもしれない。地球にあつたと言われるた〇ごつちの仲間みたいな感じもする。だけどそれだけの理由で俺はふゆつちと呼ばれていたのか
？ やっぱり……

「あれですね、アリシアさんつて大人つて感じがしません」

「一番氣にすることを躊躇なく言われた!? ひどいよ……」

がくりと肩を落としているアリシアさん。その姿を見て少し可愛いと思つてしまつたのは、きっと悪くないはずだ。

「でも……」

アリシアさんを見て口を開く。アリシアさんは少し涙目になりながら俺のほうを見る。

「ありがとうございます、アリシアさん」

自分ではわからないけれど、きっと俺は笑っているだろう。嬉しかったのだ……ただただ、こうやってってくれたことが。我ながら単純だとは思う。

「その笑顔、百二十点っ！」

そういって親指を立てるアリシアさんは、最初の時の何十倍も輝いて見えた。